ヴァチカン：内部対立が表面化

大ローマ布教所長
山口　英雄　*Hideo Yamaguchi*

現法王ベネディクト16世は4月の誕生日を迎えると満85歳になる。そして法王に選出されてから、7年が過ぎようとしている。選出された時、既に高齢になっていた法王は、口外はされなかったが、そんなに長くは生きないだろうと、心中思っていた高位聖職者がかなりいたようだ。

昨年11月半ばより、「現法王はそんなに長く生き延びないで、2012年中には死ぬだろう」という噂が広がった。これは自然死を意味するのか、暗殺を示唆しているのかよく分からない。こういう噂が出るということは次期法王の選出問題が絡んでいるようだ。現法王はドイツ人だ。前ローマ法王はポーランド人だった。265代の法王が続く長い歴史の中で、イタリア人以外の法王は非常に少ない。その中にあって、今は、2代続いてイタリア人以外の外国人法王なのだ。それ故に、次期法王になりたい枢機卿はイタリア人の中にたくさんいると考えられる。もちろん自分が次期法王になるのだと公言する枢機卿はいない。

最近になって、ヴァチカンの内部の情報が、故意に外部に流され、メディアに利用されているようだ。

先ずは、2011年5月27日にダリオ・カストリヨン・ホヨス大司教が「ヴァチカン内部に各種の堕落を矯正しようとする動きがある」ことを国務長官タルチズィオ・ベルトーネに手紙に書いて送ったこと。

2番目に、財政の透明化について。昨年4月に法令化されたが、実施されたのは2012年1月31日からである。過去に遡って効力を発揮していないということ。

3番目は、ヴァチカンのイタリアの銀行にプールしていた約180億円を銀行からのコントロールを避けるためにドイツの銀行に振り替えたことである。

さらに、大きな話題を挙げよう。

2月11日に発行された新聞『FATTO QUOTIDIANO』（日常の出来事）は、「反法王の謀反がある。法王はこれから12カ月以内に死ぬか、精神錯乱状態に陥るだろう」と報じた。それを示すものが、2011年11月に北京を訪問したシチリア・パレルモの大司教パオロ・ロメオの話の内容だ。そして、現ローマ法王は内密に自分の後継者選びをしていて、枢機卿で、現ミラノの大司教（スコーラ）を選んでいるという。さらに、法王は国務長官ベルトーネを憎んでいて、彼を交代させようとしていると述べたようである。

当の大司教は、そんなことは話していないと否定しているし、北京への旅行は純粋に私的なもので他意はないとコメントしている。

国務長官ベルトーネは反法王派の筆頭格であると見られている。彼に付き従うのはドメニコ・カルカンニョ、ジュゼッペ・ヴェルサルディ、ジュゼッペ・ベルテッロなどの枢機卿である。イタリア・カソリック界における長年の大抗争は、法王庁を弱めるものであって、カソリック界を宥めるものではない。だから、ベルトーネ長官の動きに反対するイタリア人枢機卿も多い。彼に対する批判で多いものは、国務長官の役割を根本的に変革したことである。つまり、国務長官の役割を「副法王」のそれに変えたのである。このことは先代の法王ヨハネ・パオロ2世が、後年病にかかっていた時の国務長官アンジェロ・ソダーノの立場によく似ている。ベルトーネ派の人はベルトーネが現法王の後継者であると考えている。しかし、彼の反対派は、今までのヴァチカンの国務長官としては最低の一人であり、その上田舎者であって、カソリック教会の品位・品格を落としているという。そのベルトーネは、ヴァチカンを揺るがせたドキュメントの流出問題があっても平静を保っている。ヴァチカン内部では「カラス」というよりも「お先棒担ぎ」として話されている。また、ミサを司ったり、ミサにあずかったりする勇気を持っていることに驚いているという。

ヴァチカンの「年鑑」を見てみよう。1962年から1964年の第2ヴァチカン公会議の頃に比べれば、ページ数にして3倍に増えている。官僚主義の増大は進むばかりである。それ故にいろいろな機構が増え、勤労者がふえ、責任感も増している。しかし、人的資源は減少傾向にある。多くの人はより高い位置を求めるが故に、現在の地位に満足していない。これはヴァチカンの内部でも同じことだ。

ヴァチカンは現在、2012年の「復活祭」を控えて4旬節に入っている。しかし、この時点での雰囲気はあまりよくないようだ。『FATTO QUOTIDIANO』によってすっぱ抜かれた記事の内容に、皆疑心暗鬼になっている。

現法王の擁護者の意見を記そう。

ドイツ人の枢機卿で78歳になるヴァルテル・カスペルは、現在生存中の第一級の神学者である。現法王が著した『ナザレのイエス』の本の中にも登場する数少ない一人である。彼と法王ベネディクト16世は40年来の旧知の仲である。互いの論説を尊重し、尊敬し合っている。彼は本年イタリアで『カソリック教会、その本質、現実、ミッション』（発行元：クエリニアーナ、Queriniana）を発行した。その著書の中で彼は「教会の将来」について語っている。「新しい出発は、第2ヴァチカン公会議を齎したような動きの中でのみできるのだ。それは3つのことがらが一緒になっている。第1は本源より栄養素をもらった精神性の革新、第2は強固な神学的熟考、そして、第3は伝道の精神である。」「ヴァチカンに現法王追放の動きがあることは法王に申し訳ない。彼にとって悲しいことだ。」「私はヴァチカン内に権力争いがあるのを知らない。」「これは逆に国務長官やその側近を懲らしめるためかもしれない。」「ともあれ、一人ひとりがその責任者であることは間違いない。」「現法王は枢機卿で、教義省長官の時代、ヴァチカンの内部の動きに巻き込まれることなく、自分の職務を忠実にこなして来た。」「この問題は内部の官僚主義に起因しているだろう。」「国務長官を、あるいはその一派を批判したければ、すればよし。しかし、その時には論点を明確にすること、直接の対話者に客観性を示すこと、法王にも明瞭に話すこと。」「何か言いたいことがあれば、自分の責任を明確にすること。」「何か不穏な動きがあったら、国務長官に知らせるのは義務だ。」「しかし、このドキュメントをメディアに流した者がいることは非常に残念だし、失望している。」

こんな動きがある時に、法王の心境はいかがなものだろうか。

（11頁へ続く）

台湾出張報告

佐藤浩司

３月６日より３月９日まで、伝道史料室として台湾へ出張した。今回の出張は、３つの目的があった。第１は、台湾伝道史編纂に関すること、第２は、第１とも関連することで、中山正善二代真柱の台湾巡教に関すること、第３は、現地の宗教事情調査である。

第１については、台湾伝道庁前任の橋本庁長より、伝道庁の70周年を迎えるに当たり、台湾における天理教の伝道についてその歴史と現況を記録し、出版したいとの希望があった。特に、戦前の伝道について公的機関などにある史料を探査する仕事をおやさと研究所に託したいとの要請があり、おやさと研究所として行ってきたものである。台湾における戦後の歴史と現況については、担当者も決まり、現地で資料の調査収集と執筆をすることになっていた。ところが、諸般の事情により、進捗がみられず、今日に到っていたので、元庁長であった三濱先生が新たに庁長として赴任されたのを契機として、この度、台湾伝道史の編纂の議が提起され、３月６日、その第１回目の会議が伝道庁で開催されたのである。

この会議には、三濱庁長他、台湾在住の５名の方に加えて、おやさと研究所として、中国文化大学へ交換教授として赴任している金子昭氏と佐藤が出席した。この会議では、前回企画された伝道史の編纂の顛末について担当者から報告があり、その後、編纂理念、方針、内容、進め方について自由な討議が重ねられた。討議の中で、三濱庁長より、伝道史は長期的展望をもって正確な内容のものにしたい、当面、80周年記念祭に向けては、『中文天理』など既刊のものを元に再編し、読みものとなるものを作成したいとの提案があった。このことを踏まえて今回の会議では次の４点を確認するにいたった。

① 正確な記録としての伝道史の作成は今後、息の長い作業になる。
② 上記伝道史とは別に、『中文天理』等を踏まえた副読本を、80周年の記念品として作成するということも考えられる。
③ 戦前の台湾伝道史については、おやさと研究所が担当する。
④ 戦後の台湾伝道史については、アンケート調査等をもとに今後検討していく。

（以上、金子昭氏作成会議メモより）

おやさと研究所としては、これまでの戦前の資料の調査収集に加えて、戦前の伝道史の執筆を担当することと、戦後の台湾伝道における現地行政との対応や文化的活動などについて調査執筆することになった。

第２の目的である二代真柱の台湾巡教の跡を辿り、その思いを確認する作業として、今回は、昭和12年１月に執行された台湾伝道庁鎮座祭、奉告祭の後、３日間で台湾を一周した足跡の中から、高雄周辺、特に高雄駅、旧高雄神社（現、高雄忠烈祠）を訪問した。二代真柱は、現地教会への巡教が、訪問の第一目的であったようであるが、その他、土地の官庁への表敬、現地の中心的な産業となっている工場等の視察と共に、現地の神社への正式参拝を行っている。台北その他の神社でもそうであるが、神社はその土地の風光明媚な一等地に建てられている。元高雄神社があったところも高雄市内と高雄港を一望にできる高台（日本時代は打鼓山と呼んでおり、現在は壽山と呼称している）にあった。現在は、戦没兵士をお祀りする忠烈祠が設けられている。神社の建物はすでにない。かつては灯籠や記念碑であった石づくりの構造物はそのまま置かれていたが、ご多分に漏れず、刻字はセメントで埋められて読めないようになっていた。ただし、一部、意図的にセメントを剥がしている箇所が、しかも最近施されたと思われる形跡であるのが興味深かった。

第３の現地の宗教調査として、忠烈祠のある高台は、現在「壽山公園」となっており、東屋が設けられ散策できるコースとなっている。この山中に、法興禅寺と元亨寺という禅宗の寺院が２カ所ある。法興禅寺は戦後に設けられた新しいお寺で、住持は、対外活動を積極的に行うことで知られた方のようである。訪問の折には、建物に施錠がされており、人の気配がなかった。一方、元亨寺は、堂塔も数多く建てられ、ここに生活しながら奉仕する僧侶だけでも200人はいるという大寺である。大雄宝殿には、正面に釈迦、阿弥陀、薬師の３如来、その両脇に普賢、文殊の２菩薩が鎮座していた。上席の尼僧と思われる旭慧師にいろいろとお話を伺うことができた。信者会館や学校経営などかなりの規模を維持するには、相当の経費がかかると思われるが、ほとんどが信者の喜納で成り立っているようである。台湾の人々を惹きつけ魅了する信仰について、深く考えさせられた。僅かな日程の中で、お陰で充実した時間を過ごすことができた。

（２頁からの続き）

【註】
（１）現在は大連市金州区。
（２）当時の大連市街図を見ると、「西通り」は当時の大連の中心部にあった「大広場」と呼ばれるロータリーから西（正確にはやや南西）に延びる道に「西通」という地名が見られる。ちなみに東（正確にはやや北東）に延びる道には「山縣通」と記されている。また、南に向かう道には「播磨町」と記され、北に向かう道は、現在筆者の目にできる市街図には地名が記されていないが、「奥町」であると思われる。奥町は翌年の昭和13年に吉原氏が最初に布教所を設置した間借りの部屋のあった所である。
（３）丸山時次氏は理実分教会初代会長で、吉原氏の長兄・高橋本次郎氏の妻・久子の兄である。
（４）福田文雄氏は吉原氏と同郷で、後年、日光伝道班として妻と共に中国・開封へ布教に出るが、志半ばにして布教地で身上を患い出直してしまう。

（６頁からの続き）

法王も神に、イエス・キリストに仕える僕である。ヴァチカン内部にどんな動きがあろうと、任務を全うするために全力を尽くしているようだ。

今、ヴァチカンは４旬節の時期。それ故に議会は精神的訓練を行っている。２月27日から１週間は全員瞑想に専念した。この間法王はなにがしかの差し入れをすることを怠ってはいなかった。そして、枢機卿たちに次のように思考し、行動することを要請している。「福音の論理に入ること」「権力志向と名誉獲得志向を放棄すること」そして最後に「謙譲の精神の欠如は教会の統一を破戒するものだ」と締めくくった。

２月12日の日曜日のアンジェルスの話を引用しておこう。

「キリストの行為と言葉は救済の歴史でもある。神の意思がわたくしたちを救済するために受肉されたものだ。」

「私たちは浄化されねばならない。」

「神の愛は、あらゆる悪よりも、伝染病の悪よりも、凶悪な悪よりも遥かに強い。」

さらに２月19日には次のように語っている。

「全員が教会の中では信仰にすがるのだ。あるいはその権威にすがるのだ。自分自身のための信仰は本物ではない。」